

2008年夏学期のまとめ

2008年の夏は、サマースクールを申し込み、聴力障がいについて学ぶオーディオロジーというクラス（正式なクラスの名前：Audiology and Hearing Technology for Educators and Counseling Professionals）を履修した。このクラスは、オーディオロジスト（聴力の専門家）の養成を目的とする Hearing, Speech and Language Sciences という学部が開講しているが、選択科目ではなく、必修科目の1つである。また、このクラスは秋学期にも開講されることになっているが、短期間に集中的に学べるということや、秋学期はほかの科目にじっくり時間を費やしたいということから、夏休みを利用してこのクラスを受講することに決めた。

クラスでは、はじめに、オーディオロジストという職業の紹介から始まり、オーディオロジーとはどんなことを勉強するのかについての講義がなされた。具体的には、アメリカにおいてオーディオロジストになるためにはオーディオロジーの修士号を取得する必要があること、オーディオロジストは聾学校などの教育機関や病院、クリニックなどの医療機関だけでなく、軍隊の健康管理を支えるために軍事施設で活躍している人もおり、彼らの活動の場が多岐にわたること、などである。次に、音の仕組みについての章に入り、音が存在するために必要不可欠な要素や音の伝達方法に関する内容を学んだ。さらに講義が進むと、今度は医学的な観点から耳の構造について勉強し、それに関連して、現在盛んに議論がなされている人工内耳についても学習した。人工内耳について一通り学習した後、宿題として、加齢とともに聴力が低下し、人工内耳を装用するべきかどうか悩んでいる50代の相談者に対し、ソーシャルワーカーの立場から情報提供を含め、どのようにアドバイスすればいいのか、その内容をレポートにまとめよという問題が出た。

以上に加えて、通常のクラスの時間帯以外に、ギャローデット大学にある聴力検査室を訪れ、現役のオーディオロジストにより聴力検査の進め方や検査により得られた様々なタイプの聴力図の見方についての講義を受けるなど、臨床の機会も与えられた。聴力図の見方については、クラスでも様々なタイプの聴力図のコピーが配られ、一つ一つの聴力図を見ながら、考えられる聴力損失の原因、それぞれの病気の前兆・予兆となる症状、病気の具体的な治療方法などを学んだ。

そして、最終レポートでは、ろう者・難聴者を対象とした協会や機関が利用している公共施設を2つ取り上げ、視覚的コミュニケーションや生活環境音の聴覚的評価の観点から、ろう者・難聴者それぞれにとっての利便性や快適性を分析し、各施設

において必要な道具や装置は何か、またそれらを手に入れるにはどれくらいの予算がかかるのかについて考え、説明せよという問題が出た。

このオーディオロジーのクラスは、3週間という短い期間であり、毎日の予復習が欠かせなかったが、今まで学んできたこととはまた違う分野の内容を勉強し、新鮮な気分で講義に臨むことが出来た。また、自分の聴力について客観的に見つめ直す良い機会にもなり、一面的な視野にとらわれず、柔軟な思考を持つことの重要性も学べたクラスであったと思う。